

|             |            |
|-------------|------------|
| 群<br>教<br>セ | G10 - 01   |
|             | 平 14.206 集 |

# 郷土のよさを大切にしようとする心情を 育てる道徳指導の工夫

－ 「鬼瓦作り・藤岡のお宝探し」と関連させた地域人材の活用を通して －

特別研修員 田村 明美

## 《研究の概要》

本研究は、道徳の時間と総合的な学習の時間を関連させ、地域人材の活用を通して、郷土のよさを大切にしようとする心情を育てる指導の工夫について、実践的に研究したものである。具体的には、総合「鬼瓦作り・藤岡のお宝探し」の体験活動で郷土のよさの認識を広げながら、道徳1で郷土の誇りを、道徳2で郷土の大切さを、道徳3で郷土に対する関わり方を考え、地域人材の話を聞くことで、郷土への愛着をより深めていく指導の工夫を行った。  
【キーワード：道徳 小学校 郷土愛 総合的な学習の時間 地域人材】

## 主題設定の理由

私たちの生活の主な舞台は郷土である。郷土には、自然的条件を生かした産業や暮らし、文化、史跡などがある。それらは郷土の発展やよりよい生活を願って、昔から連綿として受け継がれてきた人々の営みの所産でもある。そうした先人の働きや苦労、努力の上に、現在の私たちの生活が成り立っていることを考えたとき、私たち自身も郷土を愛し、その発展に寄与していくことが求められよう。

本学級の児童（小学校5年生 男子18名 女子18名）は、ほとんどが当地で生まれ育っており、成長するにつれて藤岡市内のいろいろな場所についての認識を増やしている。また、生活科・社会科の授業でも藤岡市の特徴などを学んできている。しかし、日頃の生活では自分たちを丸ごと育ててくれている郷土に対する意識をあまりもたずに暮らしている。その原因としては、郷土について考える機会が少ないこと、郷土は日常の生活や行動の範囲であり、身近なためにかえってそのよさや尊さが見えにくくなっていることなどが考えられる。

本研究は、総合的な学習の時間「藤岡瓦を調べよう・藤岡のお宝を探そう」の郷土のよさに触れる体験活動と関連させた道徳の授業で、郷土のよさを尊び、大切に受け継いでいる地域の方の思いや願いに触れながら、郷土を愛する気持ちを育てようとするものである。

具体的には、まず、総合「藤岡瓦を調べよう」の中で、「鬼瓦作り」の体験活動を行い、その鬼瓦が焼かれて届けられたときに合わせて、道徳1「鬼瓦の町、藤岡」で郷土の伝統工芸を大切にしようとする気持ちを培う。次に、総合「藤岡のお宝を探そう」で郷土の自慢や誇りを探し集め、「お宝発表会」を行い、道徳2「ふるさとのお宝」で、郷土に寄せる人々の思いや愛着について考えていく。それを受けて、道徳3「この町に育って」で郷土のよさを主体的に大切にしていこうとする気持ちを育てていく。また、それぞれの道徳の時間のねらいを達成するのに効果的と考えられる地域の方を教室に迎え入れ、郷土を愛する心を学ぶようにする。

このように、郷土のよさが具象化された「もの」に着目する道徳、郷土に寄せる人々の思いを考える道徳、郷土に対する自分の思いを今後に生かそうとする道徳を積み重ねることによって、郷土のよさを大切にしようとする心情を育てられると考え、本主題を設定した。

## 研究のねらい

道徳「わたしたちの町のほこり」[ 郷土愛 4 - (7) ] において、総合の体験活動と関連させながら、地域人材を活用する、道徳 1「鬼瓦の町、藤岡」で郷土の伝統工芸のよさを考える学習、道徳 2「ふるさとのさくら」で郷土に寄せる人々の思いや愛着を考える学習、道徳 3「この町に育って」で郷土のよさに対する自分の思いを今後に生かそうと考える学習を通して、郷土のよさを大切にしようとする心情を育てられることを実践を通して明らかにする。

## 研究の見通し

- 1 総合「鬼瓦作り」の体験活動の後で、道徳 1【資料名「鬼瓦の町、藤岡」】の学習において、伝統的な鬼瓦作りを受け継いでいるゲストティーチャー（以下、「G T」と記す）の話聞くことによって、郷土の伝統工芸のよさを郷土の誇りとして大切にしようとする気持ちが育つであろう。  
（事前の直接体験で生まれた、郷土で育まれてきた「もの」に対する愛着・尊重の深まり）
- 2 総合「藤岡のお宝探し」で郷土にはたくさんの「お宝」があることの認識を広げた後で、道徳 2【資料名「ふるさとのさくら」】の学習において、水没した郷土をこよなく愛する G T の話を聞くことによって、郷土のよさを感じ取ることができるであろう。  
（暮らしや営みを育んできた郷土に対する認識の広がり、人々の郷土を愛する心への共感）
- 3 道徳 3【資料名「この町に育って」】の学習において、郷土文化の継承発展のために祭囃子を子どもたちに指導している G T の話を聞き、郷土のためにどんなことができそうか考えることによって、郷土のよさを大切にしようとする気持ちが高まるであろう。  
（郷土社会に暮らす一員としての目覚め、郷土に対する自分たちの心のありよう）

## 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 目指す児童像について

「郷土のよさを大切にしようとする心情が育った子」とは次に示すような姿であると考えた。

郷土のよさ（もの）に具体的にに関わり、そのよさを感じている子

郷土のよさ（もの）に具体的にに関わる中で、そのよさを感じ、尊さを認識している。

郷土は、人々の暮らしや思いが詰まっている場であることに気づいている子

郷土には連綿として続いてきた歴史や暮らしがあり、人々の思いや願いがたくさん詰まっている心の拠り所としての場であることに気づいている。

郷土のために役に立ちたいという気持ちをもっている子

郷土社会の一員として、自分のできることで役に立ちたいという気持ちをもっている。

#### (2) 総合的な学習の時間「鬼瓦作り・藤岡のお宝探し」について

「鬼瓦作り」は総合「藤岡瓦を調べよう」の中の体験活動の 1 つである。藤岡は良質の粘土層に恵まれ、奈良時代には瓦が焼かれた歴史を持つ。児童は鬼師の指導で鬼瓦を作り、伝統的な「だるま窯」で 2 日間かけて焼いてもらう。「鬼瓦作り」は、「郷土のよさ」を直接体験できる活動であるとする。この体験活動で感得した認識や気持ちを特に道徳 1 で生かしたい。

総合「藤岡のお宝探し」は、児童が郷土の自慢を調べる中で「郷土のよさ」にかかわり、その認識を広げるために行う。主に夏休みの自主的な調査活動が中心になる。その際、「お宝」

に関わる人々の思いや願いにも目を向けさせる。「お宝」は、文字通り市民の財産として、人々に愛され大切にされている存在であり、人の営みや心の象徴として「郷土のよさ」が凝縮されているものであると考える。児童が探してきた「お宝」は、発表会を通して個人調査から集団へと共有される。この体験活動で感得した認識や気持ちを特に道徳2で生かしたい。

### (3) 地域人材の活用について

郷土という地域の学習であるので、郷土を愛し、具体的に各分野で郷土に貢献されている方をGTとして迎え、郷土のよさを継承しようとする責務や使命感、郷土の発展を願う気持ちなどを語っていただく。また、GTを選ぶにあたっては児童にとって身近な生活圏の方とする。

GTには授業の最初から児童の学習の様子を参観してもらうが、読み物資料で児童の価値観が高まった授業の後段で登場してもらい、児童の考えを賞賛したり、補足したりするように数分話をしていただく。授業の事前には、GTとねらいに迫るための話のポイントを打ち合わせておく。事後には児童が学習の感想を含めたお礼の手紙をGTに書く。

次の3人を各授業のGTとして選んだ。

道徳1 伝統的な技術を用いて、江戸時代からの鬼瓦作りを継承し五代目となる鬼師の方。

道徳2 下久保ダム建設に伴い、30数年前、本校の通学区内に転居してきた方。現在は市の古墳公園建設のために発掘調査に関わっている。(本校児童の祖父母)

道徳3 藤岡祭りのお囃子を指導している方。A町内の本学級児童にも指導をしている。(本校児童の父・祖父)

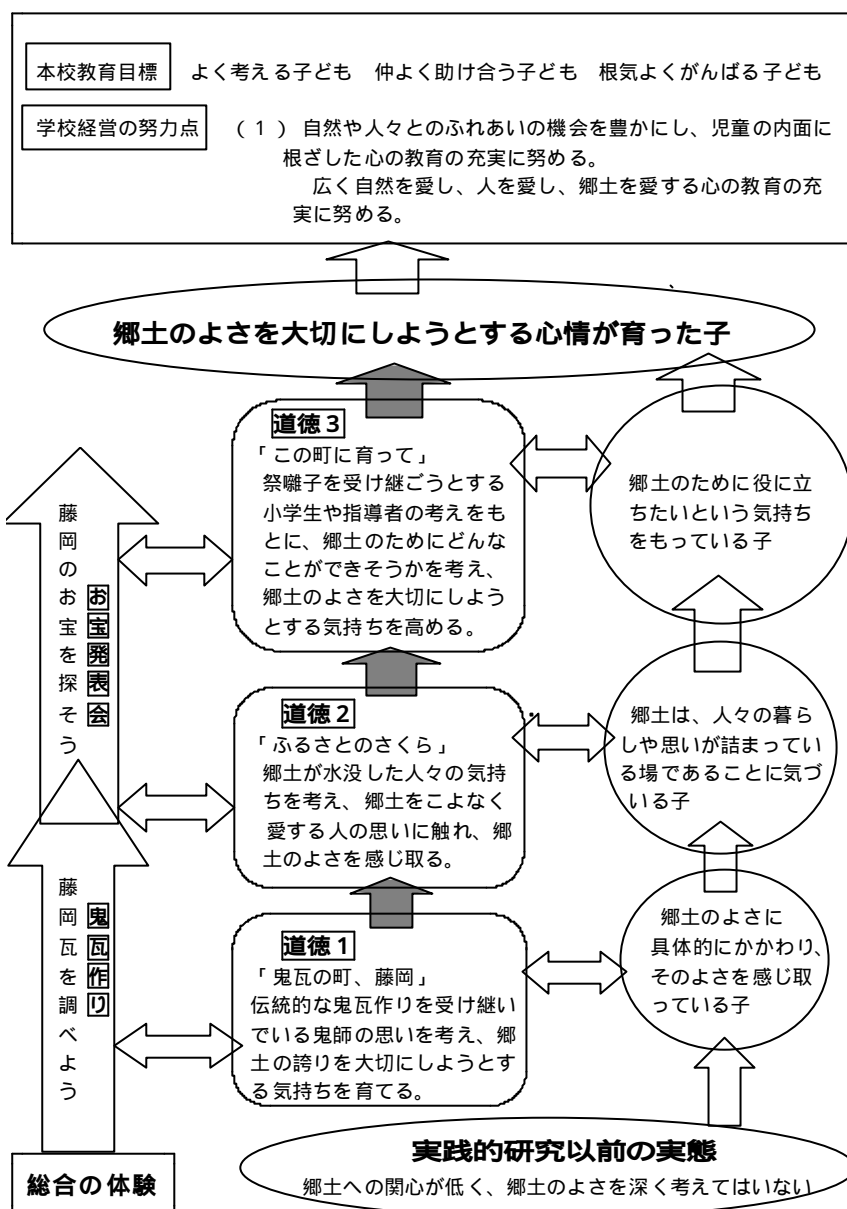


図1 全体構想図

## 2 実践の概要および結果と考察

検証にあたっては、事前調査で児童の郷土に関する意識を把握し、実践研究の中での学習シートやG Tへのお礼の手紙などで実践経過に伴う変容を分析するとともに、変容の具体例として、二人の抽出児を選んだ。

#### (1) 抽出児について

【A男】 父親は東京出身であるが、母親は市内出身である。事前調査「藤岡に関するアンケート」で、「藤岡のよいところはわからない」「藤岡のためにできそうなことはわからない」と答えた。郷土に対する関心はあまり高くない。

【B子】 両親とも市内の出身である。事前調査で、「藤岡のよさは、自然がいっぱいあること」「藤岡のために今できそうなことはпой捨てをしないこと。」と答えた。相応の回答ではあるが、郷土のよさに対する認識をいっそう広げたり深めたりできると考える。

#### (2) 郷土のよさに具体的にかかわり、そのよさを感じ取れたか。

##### ア 実践の概要

「鬼瓦作り」の体験活動を行い、焼き上がった鬼瓦を手にして数日後、「わたしたちの町のほこり」の学習の1回目として道徳1を行った。「ふるさと藤岡のじまん」について考えようということで、自作資料「鬼瓦の町、藤岡」を読み、鬼瓦を作る技の巧みさなどを話し合い、「鬼師は、鬼瓦のことや藤岡のことをどんなふうに思っているか」想像した。その後、G Tに登場してもらい、郷土の風土を生かした貴重な伝統工芸を受け継ぎ、発展させたいという願いや、郷土を愛すればこそその使命感などを聞いた。

自作資料「鬼瓦の町、藤岡」のあらすじは次の通りである。学校で「鬼瓦作り」を行うことになった主人公の少年が、実際に目にした鬼師の手作りの技のすばらしさに魅せられ、手伝ってもらいながらも自分で作った鬼瓦に満足する。鬼師から、「藤岡では質の良い粘土が採れたために瓦作りや町が発達した」ことを聞く。鬼師の五代前の先祖は良い粘土を求めて江戸から藤岡に移り住み、鬼瓦作りの伝統が今に続いている。鬼瓦は魔よけの意味があり、藤岡の町ではたくさんの鬼瓦がにらみをきかせている、というものである。

##### イ 結果と考察

児童は、事前に「鬼瓦作り」の体験活動を行い、鬼師の技を実際に見ているので、読み物資料に対する発問「鬼瓦作りの技の見事なところはどこか」「鬼師は鬼瓦のこと、藤岡のことをどう思っているか」などの発問に対しては的確な答えが返って来た。「みんなの考えが合っているのか、本当に聞いてみよう。」と、G Tを迎え入れると、児童の驚きの声や歓声が上がった。G Tの「みんなの考え

た通りです。」の言葉の後、良質の粘土に恵まれた藤岡で先祖代々続いている鬼瓦作りを継承することの意義や父親から満足できる作品作りのための修練の大切さを指導されたこと、鬼師は全国で20人程しかいないことなどの話を聞いた。

資料1は、授業の最後に児童が記述した、「郷土のよさ」を「もの」「人・技」「心」の3観点に

資料1 道徳1で見られた郷土に対する認識

| はG Tの話を受けてとらえた内容 |            | 数字はのべ人数    |          |
|------------------|------------|------------|----------|
| 郷土のよさ「もの」        | 郷土のよさ「人・技」 | 郷土のよさ「心」   |          |
| ○鬼瓦は藤岡のお宝だ       | 2          | 技を受け継ぎ、修行  | 鬼瓦の伝統を受け |
| ○鬼瓦のことをみんな       |            | しないと本物は作れ  | 継ごうと頑張っ  |
| に知って欲しい          | 2          | ない         | いる       |
| ○鬼瓦は町のお守りだ       | 1          | 10畳もある鬼瓦を  | 伝統を受け継ぐこ |
|                  |            | 作れるなんてすごい  | とは大切なこと  |
| ○鬼瓦のことを自慢し       |            | 瓦職人はすごい    | 心をこめて鬼瓦を |
| たい               | 1          | 藤岡には伝統の技が  | 作っている    |
| ○鬼瓦のことを知っ        |            | ある         | 願いがこめられて |
| て良かった            | 1          | 伝統を守り抜いて欲  | いる鬼瓦のある、 |
| ○伝統の鬼瓦はすばら       |            | しい         | いい町なんだな  |
| しい               | 1          | 藤岡に鬼師がいてよ  |          |
|                  |            | かった        |          |
|                  |            | 職人が増えたらいいな |          |
| 計                | 8          | 計          | 21       |
|                  |            |            | 計        |
|                  |            |            | 18       |

分類したものである。鬼瓦という郷土の卓越した伝統工芸品（もの）については、事前の体験「鬼瓦作り」を通して、すでに児童の内面に「優れた価値のあるもの」「郷土の自慢」といった認識が芽生えていたが、それがいっそう増したと考えられる。

加えて、G Tの話を通して、伝統的な技術の継承の上に現在の姿があることや藤岡で育まれてきた伝統を受け継ぐことの大切さなど、精神面に着目した記述が「もの」をはるかに上回っていることがうかがえる。「郷土のよさ」の概念の中に、「もの」そのものだけでなく、人間の営みやそれを支える思いが膨らんできたものと考えられる。

資料2は、A男とB子の「G Tに宛てた手紙」の一部である。A男は藤岡の良質の粘土、鬼瓦の立派さとそれを支えている伝統的技術の修練を指摘した。B子は以前は興味のなかった鬼瓦への愛着と関心を強く示した。2人とも、郷土の伝統工芸を肯定的に評価しており、G Tとの関わりによって、郷土の「もの」のよさを感じ取った。

これらのことから、「鬼瓦作り」の体験と「鬼瓦の町、藤岡」の学習を通して、郷土のよさに具体的にに関わり、そのよさを感じ取れたと言える。

#### 資料2 G Tに宛てた手紙

【A男】山口さんは高校生の時から鬼瓦作りをしていたなんて、とっても鬼瓦が好きだったんですね。だからこそ今は立派な鬼師になったんですね。それに良い粘土がとれるし、この藤岡で鬼師を始めてよかったですね。この間、らん藤岡で作品を見せてもらいました。ぼくの顔をにらみつけているような感じで、とってもこわくかっこよく見えました。これからもこの藤岡でたくさん鬼瓦を作ってください。

【B子】私は山口さんと鬼瓦を作ってとても楽しかったです。それをきっかけにもっと鬼瓦を作りたいなあと思いました。私はそれまで鬼瓦なんて興味がなかったし、知りたいなんて全然思いませんでした。もっと鬼瓦のことを知りたくなりました。これからも鬼瓦を作り続けてください。

(3) 郷土は、人々の暮らしや思いが詰まっている場であることに気づいたか。

#### ア 実践の概要

道徳1で、郷土の「もの」のよさ、それに関わる連綿と続いてきた人の営みや思いを感じ取った後、「藤岡のお宝発表会」で自分が調査してきた「お宝」を紹介し合った。紹介された「お宝」は、遺跡・古墳・古城・神社・用水・巨木・市民の憩いの場など18種に上り、「郷土の自慢」についての認識を広げた。その後、道徳2を行った。

道徳2では、人間にとって郷土はどんな意味をもっているのかを考えていった。郷土がダム建設で消滅してしまう岐阜県の実話「ふるさとのおくら」の読み物資料で郷土に寄せる人々の惜別の愛着について話し合い、その上で、読み物資料と同様に、郷土をダムによる水没で失ったG Tの体験談を通して、自分たちの郷土の存在感や大切さに気づかせた。

#### イ 結果と考察

導入で、藤岡市には「お宝」がたくさんあることを再確認した後、「ふるさとってどんなもの？」について考えていこうと、読み物資料「ふるさとのおくら」を読み進め、村人たちの心の拠り所である、「お宝・桜の木」の移植に関わった人たちの思いや願いを話し合った。児童は、発問「村人が桜の木の移植を願った理由」「関係者が移植をどんな気持ちで行ったか」などで、「ふるさとを失う代わりに桜の木だけでも残って欲しい。」「村を愛する気持ちを大切にするためにも移植を成功させよう。」という郷土を愛する気持ちを発言することができた。

その後、G Tから次のような体験談を聞いた。「今から三十数年前、私のこどもが小学生と幼稚園の頃、ダムができることになり、村の人たちは皆、いやいやながら引っ越すことになりました。私の家は引っ越すのが遅い方だったので、毎日、少しずつ湖の水面が上がって来ていました。今まで通っていた道、こどもが遊んでいた場所が沈んでいきます。それを見ていると、早く出て行けと言われていたようで、とてもつらく胸が締め付けられるようでした。引っ越す時には庭木を切り倒して行くことになっていたのですが、こどもが、お父さん、あの梨の木だけは切らないで、カブトムシがいっぱい来る木なんだから。切り倒したら、もうカブトムシが

来られないよ。と言うので梨の木だけは切ることができませんでした。その後、湖の水が減った年に、昔の村や家、道路や畑が見えたことがあって、とても悲しかったです。」

涙を流して話すG Tの体験談に、もらい泣きする児童も見られた。

資料3は、G Tの体験談を聞いた後で、「ふるさとしてどんなもの？」について、学習シートに記述された内容の中から「ふるさが大切だと思う根拠」と、「藤岡に対する自分の思い」が表出したものについて、列挙したもの

である。郷土には、数々のお宝や暮らし、それを築いてきた人々の思いが詰まっており、単なるスペースではなく、自分たちを育む母親のような場であるとしてとらえていることがうかがえる。これは、読み物資料が、郷土がなくなるといった設定で逆説的に郷土の大切さを語りかける内容であったこと、加えてG Tの体験談が、生き証人のような説得力をもっていたためだと考えら

れる。また、G Tの体験談の最後で「皆さんにとっては藤岡がふるさとです。ふるさとで生まれ育ち、これからも暮らしていける皆さんはしあわせです。」と、児童の生活に視点を向け、自分たち自身の立場を見つめ直させたことにより、「藤岡に対する自分の思い」が引き出されたのだと見られる。さらに注目すべきは、児童の記述の中には、今後の自分のあり方にまで及んでいる記述があったことである。

資料4は、A男とB子の「G Tに宛てた手紙」の一部である。A男は郷土がなくなることの悲しみに共感し、G Tの郷土に対する思いを尊重している。B子も同様であるが、これまで郷土意識をもたずにいたことや、自分の郷土のよさを改めて思うなど、郷土に対する思いを表出している。

これらのことから、「お宝探し」の体験と「ふるさとのさくら」の学習によって、郷土を尊いものと認識することができたと考えられる。

(4) 郷土のために貢献したいという気持ちをもてたか。

ア 実践の概要

### 資料3 道徳2で見られた郷土に対する認識

| ふるさが大切だという根拠(人)         | 郷土藤岡への思い(人)      |
|-------------------------|------------------|
| ○思い出がたくさんあるから 15        | ○藤岡を失いたくない 8     |
| ○自分が生まれ育った場所だから 15      | ○ふるさとの意味がわかった 6  |
| ○ふるさがなくなったら悲しいから 7      | ○ふるさと藤岡を大切にしたい 3 |
| ○家族やみんなと暮らし、過ごせたから 3    | ○とてもよいふるさと 3     |
| ○みんなの協力や思いがあるから 3       | ○思い出がたくさんある 3    |
| ○安心できる所だから 2            | ○とてもすばらしい所 2     |
| ○楽しいことやつらいことを分かち合ったから 1 | ○藤岡で暮らしたい 1      |
| ○お宝がたくさんある所だから 1        | ○思い出を大切にする 1     |
| ○ご先祖様のお墓があるから 1         | ○家族に大切さを話す 1     |
| 計 48                    | 計 28             |

### 資料4 G Tに宛てた手紙

【A男】お話をしていただいて初めて、家がなくなること、大切なものがなくなること、こんな悲しいことはないと思いました。坂居さんのお話でしっかり心に入りました。下久保ダムに300けんものお家がしずんではいるとは思ったこともありませんでした。下久保ダムのボートに乗ったことがありますが、ダムの下にしずんだお家の人に失礼なことをしたなと思いました。今度下久保ダムに行ったら家族に話してあげるつもりです。

【B子】私は自分の家や近所の神社などが水にしずんで、藤岡全体がダムになるのは、とても悲しいことだと思います。前は、ふるさとなんて考えてもみなかったけど、「ああ、自分のふるさとしてすばらしいな」と思いました。改めて自分の生まれ育った藤岡を「すてきな所」と思いました。今度、下久保ダムに行った時には「ああ、坂居さんの家はこの下なんだ」と深い思いをもって行きたいと思います。

道徳2で、郷土の精神的なよさを感じ取った後、道徳3では、課題「藤岡のためにできそうなこと」を提示し、郷土と自分の主体的な関わり方を考えていった。まず、児童全員がなんらかの形で参加経験があり、「藤岡のお宝」の一つでもある、藤岡祭りを取り上げた。数人の児童も参加して、G Tにお囃子を演奏してもらい、自作資料「この町に育って」を読み進めた。

「この町に育って」のあらすじは、母から促されて、お囃子の練習に参加することになった主人公の小学生が、練習しているうちにお囃子が楽しくなる。お祭りの当日は、わくわくしてお囃子をし、自分のしていることが町のお祭りを盛り上げていることに気づく。指導者の、「代々続いてきたお囃子を受け継ぎ、伝えていくことが育ててもらった町への恩返しだ」という考えを聞き、来年も参加しようと決意する、というものである。

読み物資料で、主人公のお囃子に取り組む気持ちの変化や自分がしていることが郷土のためになっているという自覚、また、指導者の郷土を愛する気持ちを話し合った。その後、藤岡市の伝統のあるお囃子を後世に引き継ぎたいと尽力しているG Tの郷土に対する考えを聞いた。

そして、郷土の一員として、郷土のために自分にどんなことができそうかを考え、発表していった。

## イ 結果と考察

導入では、教室にお囃子の太鼓や笛が鳴り響き、お祭りの雰囲気には児童は興奮する様子であった。中でも、G Tと一緒に囃子をした児童たちは真剣ながらも満足そうな表情であった。

読み物資料での発問「お囃子を指導している人の気持ち」では、「伝統のお囃子を受け継いでもらいたい。」「お囃子がずっと続いて欲しい。」「などの発言が得られた。それを確かめるためにG Tから話を聞いた。その主な内容は、「藤岡祭りは町を守ってくれている2つの神様に楽しんでもらうために始まりました。お囃子は神楽とも言い、漢字で「神楽」と書きます。楽譜がないので、生演奏で受け継いで行くしかありません。200年も前から続いています。町内によっては子どもが少なく、他の町内から応援してもらう所もありますが、町内ごとにお囃子が少しずつ違うので、それを受け継いでいって欲しいです。」「といったものである。

その後、「藤岡のためにできそうなこと」を話し合った。その際、「藤岡がもっとよい町になったり、市民が喜んだりすることならば何でもいですよ。」とアドバイスをした。結果として、「近所や町で挨拶をする」が14人、「お囃子に参加する」が11人、「町内清掃に参加する」が7人、「お祭りのこどもみこしに参加する」が5人、その他、「交通指導の方に感謝する」「町内花いっぱい作業に参加する」

「藤岡を知ってもらう」「町で人に親切にする」「市民のものを大切にする」など、12の考えが出された。「お囃子に参加したい」と意志表示をした児童11人のうち5人は、これまで参加経験のなかった児童であり、G Tのお囃子演奏やお話が児童の内面に直接的に働きかけたためであると考えられる。

資料5は、本主題の学習のまとめとして、「藤岡のことをどう思うようになったか」について児童が学習シ

## 資料5 道徳3で見られた郷土に対する認識

「藤岡のことをどう思うようになったか」

| 印象・イメージ            |  | 数字は人数 | 郷土に対する主体的な関わりの記述   |      |
|--------------------|--|-------|--------------------|------|
| ○ いい町、すばらしい町       |  | 10    | もっといい藤岡にしたい        | 3    |
| ○ 伝統のあるふるさと        |  | 8     | 町をきれいにしていきたい       | 2    |
| ○ たくさんのいいところ       |  |       | 挨拶を頑張りたい           | 2    |
| ○ があって楽しい          |  | 3     | お囃子を頑張りたい          | 2    |
| ○ 思い出がたくさん詰まった場所   |  | 2     | 自然を大切にしていきたい       | 2    |
| ○ お宝がたくさんある所だ      |  | 2     | 藤岡のこと、お宝を大切にしていきたい | 2    |
| ○ いい人、優しい人がいっぱいいる  |  | 2     | 藤岡のことをもっと知りたい      | 2    |
| ○ 藤岡は私の一番安心できる場所   |  | 1     | 藤岡の行事に参加したい        | 1    |
| ○ この町に育ってよかった      |  | 1     | 藤岡のために何かしたい        | 1    |
| ○ 藤岡のことがよくわかってよかった |  | 1     | 伝統を守りたい            | 1    |
|                    |  | 計 30  | お囃子などを伝えていきたい      | 1    |
|                    |  |       | 藤岡のことを知らせたい        | 1    |
|                    |  |       | 人に優しくしたい           | 1    |
|                    |  |       | ○ ふるさとの思い出を忘れない    | 1    |
|                    |  |       | ○ これからも暮らし続けたい     | 1    |
|                    |  |       |                    | 計 23 |

ートに記述した内容である。その中でも、特に「郷土に対する主体的な関わり」にまで考えが及んでいると思われる記述については太枠の中に列挙した。藤岡市民として、これから自分が心がけていきたいことや自分でやっていきたいことなどが挙げられ、小学生なりに、郷土藤岡の発展を願う気持ちがうかがえる。

資料6は、A男とB子の「GTに宛てた手紙」の一部である。A男は心の中に芽生えてきた郷土への思いに気づき、自分ができることで郷土の役に立ちたいという考えをもった。B子は郷土に対する意識の変化を自覚し、郷土の役に立てる行動の種類を事前調査の時より増やした。

これらのことから、「この町に育って」の学習で、自分も郷土の役に立ちたいという気持ちがもてたと言える。

以上のように、これまでの一連の学習を通して、当初、「藤岡のよいところ」として、「自然が豊か」11人、「瓦が有名、良い粘土がある」8人、「市民が親切」7人、「安全、平和」6人など「よさ」が7種類、「わからない」3人であった児童の認識が、量的に増えた。また、外形的表面的な郷土のよさだけでなく、郷土に住む人の「心」に着目して身近な郷土を見直し、裏付けのある肯定的な考えをもつ児童が増えた。とりわけ、3人のGTの話の中の高い価値が、「郷土藤岡に対して、こんなことができそうだ」という考えを引き出したと考えられる。

#### 資料6 GTに宛てた手紙

【A男】この学習をする前は、ふるさとなんてただの生まれた所や育った所だと思っていました。でも、今はぼくの心の中に「ふるさとっていい所なんだな」という気持ちがなぜあったのかふしぎに思っています。これからはぼくたちが藤岡を受け継ぐ番なので大人になってできること、今からできることを考えていきたいと思っています。緑公園の花植えをしたりごみ拾いをしたりしていますが、これからも頑張りたいです。

【B子】この勉強をする前はふるさとや伝統のことを考えずに生活していました。でも、勉強した後では何だか自分でも変わったなと思うような時があります。新井さんが教えているおはやしはもちろん、あいさつやゴミ拾いなど、今は小さなことから、大人になったら藤岡の名前を広げていきたいです。

## 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

- 「郷土のよさ」をつかませるために、本研究ではまず、代表的な郷土自慢である鬼瓦（もの）を切り口にしたが、「もの作り」という事前の体験活動によって醸成された認識や価値観が道徳の時間に生かされ、道徳的価値をより深く自覚するのに有効であることがわかった。このことは、道徳2でも同様で、「藤岡のお宝探し」と関わらせたことにより、「郷土のよさ」の認識を広げ、郷土の大切さを把握し、深めていく上でも効果が認められた。
- 「郷土のもののよさ」から入り、「郷土を思う心」への気づき、そして、「郷土と自分の関わり」へとつなげるシナリオは、児童の内面に郷土への愛着を無理なく高め、郷土に対する働きかけを促す学習の筋道として有効であることがわかった。
- 地域の人材をGTとして活用することで、郷土を思う心や考えが、児童の内面により響くことが明らかになった。3人の「地域の代表者」の訴えは、同じ地域に暮らす児童に連帯感や強い共感をもたらした。そして、郷土に暮らす者としての自覚が促され、郷土に主体的に関わっていこうとする気持ちが培われた。

### 2 今後の課題

本研究では、道徳の時間の後半の段階で地域人材をGTとして活用する場合が多かったため、児童がGTの話を聞く際、多少受け身の姿勢が見られた。今後は、「児童とGTとのやりとり」をさらに充実させたり、ねらいとする価値を相互に練り合えるような活動を取り入れたりして、GTをより有効に活用する方法に着目した研究を行いたい。